勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観はいつ現れたか

小野　正文
甲州市教育委員会文化財課

１　江戸時代の景観

標題の景観は全国的に見ても特異な景観の１つである。ではいつからこのような景観が形成されたてきたのであろうか。

ブドウについては、雨宮勘解由伝説、大善寺伝説があり、すでに昭和 37 年（1962）に『勝沼町誌』が詳細な検討をしているので、本稿では割愛して、江戸時代のブドウ畑の様子を数少ない史料から垣間見てみよう。雨宮勘解由伝説では、慶長６年（1601）の家康検地で 160 株、正徳４年（1714）菱山村２町８反６畝 26 歩、正徳５年（1715）勝沼村５町４畝 16 歩、正徳６年（1716）上岩崎村６町２反 26 歩、下岩崎村６反 26 歩とある。慶長検地では本数で、正徳検地から反別となっており、ここに大きな転換がある。よって『勝沼古事記』が文禄元年「葡萄壱町八反三畝拾八歩」としているのは後の付会と推定される。

上岩崎村の慶長検地帳は欠本があるが、すでに『町誌』が指摘しているようにブドウに関する記述はなく、統治者にとってことさら税を課すほどの段階にはなかったのかもしれない。

しかしながら、約百年後には急速にブドウ畑が拡大してゆくのである。それは慶長７年（1602）に開設した甲州街道開設が大きく影響している。豪農の屋敷内などにあったブドウが、大消費地江戸と直結したことにより、ブドウ特需が生じたのである。さらに、甲府藩主となった柳沢吉保による将軍家へのブドウの献上が大きく影響したものと思われる。

江戸時代のブドウ畑の景観は元禄６年（1693）の『甲路記』は「蒲萄棚有て 野も山もつゞきたり」とし、文化 11 年（1814）『甲斐国志』では「遥カニ不二相及ブバート云フ二村（岩崎・勝沼）ハ山続キノ畠上ニ架ヲ並ベ設クル事市中瓦屋ノ隣次セルガ如シ」とあり、山沿いの畑にブドウ棚が連なる様子がうかがえる。この時、ブドウ１本ごとの棚であれば、１畝ないし２畝ごとに棚であったろうか。もちろん竹棚である。日川の河岸段丘崖に繁茂する竹で、さほど太くならないものは竹棚用と推定される。

62.028 は６町２反 28 歩

ところで、『勝沼町誌』に上岩崎村の年代ごとのブドウ畑の反別が示されている。江戸時代を通じて徐々に増加していく傾向が見て取れる。

２　明治 13 年（1880）の祝村物産表

この物産表は飯田文彌が昭和 35 年（1960）に「近世甲州葡萄の生産構造と流通（下）」にまとめたもので、最近では『近世甲斐産業経済史の研究』（1982）に収録され、一般にも読みやすくなった。

明治 13 年（1880）といえば、高野正誠・土屋助次朗がフランスから帰り、本格的ワインを２回目に醸造した年であり、赤ワインの原料となる西洋種のブドウもようやく実った年である。ブドウは 10%以下の金額であるのに比べ、繭、生糸、蚕種、桑葉はほぼ 80%近い数値を示している。ほとんど養蚕地帯の産業構造である。

旧勝沼町の製糸場はほとんどが祝村に集中するが、明治 13 年（1880）には８軒の製糸場があり、女工 221 人を数えた。余談だが、ワイナリーの集中と製糸場の集中が相似的に思えるのは穿ったみかたかもしれない。

明治13年東八代郡祝村物産表

	種類	数量(石)	金額(円)	金額割合(%)
普通物産	米	830.0	8,300.0	7.4
	粟	2.2	22.0	0.0
	大豆	62.0	620.0	0.6
	蕎麦	37.0	240.5	0.2
	蜀黍	240.0	1,800.0	1.6
	玉蜀黍	8.8	44.0	0.0
	大麦	870.0	5,655.0	5.1
	小麦	330.0	3,135.0	2.8
	糯米	68.0	850.0	0.8
	計	2,448.0	20,666.5	18.5
	種類	数量(斤)	金額(円)	金額割合(%)
特有物産	実綿	1,200.0	87.6	0.1
	繭	24,500.0	33,125.0	29.6
	生糸	6,120.0	44,676.0	40.0
	藍葉	3,125.0	156.0	0.1
	葡萄	180,000.0	10,800.0	9.7
	蚕種	200枚	140.0	0.1
	桑葉	42,000.0	2,100.0	1.9
	計		91,084.6	81.5
	合計		111,751.1	100.0

資料：飯田文弥『近世甲斐産業経済史の研究』国書刊行会，1982，204頁より作成。

湯澤規子, 2013

３　連なるブドウ棚の景観

明治 10 年（1877）10 月 10 日、大日本山梨葡萄酒会社の高野正誠と土屋助次朗は、フランスにブドウ栽培とワイン醸造の伝習のため旅立つ。明治 11 年（1878）５月 10 日、同葡萄酒会社中一同はフランスにいる２人に対して 10 項目にわたるブドウ栽培に関する質問状を送る。片道２ヶ月以上もかかる郵便船を介しての通信とはいえ、まさにリアルタイムにフランスと祝村間で交信して栽培技術の獲得を図っていたのである。

また、明治 11 年（1878）７月 13 日の高野・土屋あての仮社長の内田作右衛門・雨宮彦兵衛の手紙では、「本年当村ニテ出来ノ苗者弐万斗出来」とあり、地元では２万本の苗を用意していたのである。また同年会社は津田仙の東京学農社から西洋種葡萄苗を購入しているが、本数は明らかでない。株主の１人、高野積成も勧農局からアジロンダック、コンコード、イザベラ、ハースホードを導入している。

山梨県は明治９年（1876）に甲府城跡に勧業試験場を設置し、城跡全体を果樹園にしており、内務省引継絵図によれば和葡萄（甲州種）226 本、西洋種 10,294 本を植えている。また、明治 12 年に、東京葡萄酒会社(仮称)が 45,000 本余りの米国産葡萄苗を用意しており、山梨分社の圃場にどの程度配布されたかは不明ではあるが、この時期、全県的にブドウ栽培の気運が高まっていったのである。

現在、調査中の文化的景観対象範囲の中のブドウ畑は、この明治 11 年（1878）を起点として展開したものといえる。ここから桑園の中に点在していたようなブドウ棚から、地域全体がブドウ棚に覆われる景観に移り変わっていったのであろう。